

# 『ドン・キホーテ』を読むトーマス・マン スペイン文学の立場から

稲 本 健 二

## 1. はじめに

トーマス・マンは死に臨んで、焼却処分をしなかったために手許に残っていた日記を「死後二十年間は何人も開封すべからず」という言葉で封印した<sup>1</sup>。この封印が解けたのは今からおよそ四半世紀前の1975年である。こうしてトーマス・マン研究に作品の成立過程を解明する貴重な資料として新たに日記が加えられ、特にペーテル・ド・メンデルスゾーンが1977年に詳細な索引を附して公刊してからは、トーマス・マンの日記は必須文献となった感が強い。しかしながら、未だに日記が充分に利用されているとは言い難いように思われる<sup>2</sup>。トーマス・マン研究において、公刊された日記と詳細に付き合わせることで事実関係の認定を改めて見直す必要に迫られている状況は、四半世紀前と変わっていないのではないだろうか。

日記と同様に資料としても利用されるものには書簡があり、トーマス・マンの場合にはさらに評論あるいはエッセイも含まれる。時事問題に言及した評論には、彼の政治思想が色濃く反映されている。フィクションではないからこそ、資料としても利用されるのである。マンが初めてアメリカへ渡った時の船旅の様子を記した紀行文『ドン・キホーテとともに海を渡る』（1934年、以後『海を渡る』と略記）も、全集版では評論の中に分類されている。確かに、マンが船でアメリカへ渡ったのは事実だし<sup>3</sup>、日付も附されたこの紀行文は航海日誌のようなスタイルで書かれていることから、事実を含む記述は多いと考えられる。しかしながら、日記とつきあわせると、少なからぬ脚色が認められることも軽視すべきではない。

---

「言語文化」6-4：615 - 635ページ 2004.  
同志社大学言語文化学会 ©稲本健二

既成の『海を渡る』に関する研究では、まったく日記を参照していないか<sup>4</sup>、参照していてもその扱いに恣意的なものが窺える<sup>5</sup>。マン自ら2度も焼却処分をしたことや<sup>6</sup>、死後20年も封印したという事実からも、マンの日記は偽ることなき事実をあからさまに暴露している一級の資料だと考えられる。本稿はスペイン文学の立場から<sup>7</sup>、セルバンテス畢生の大作『ドン・キホーテ』を読むことに触発されてトーマス・マンが著した紀行文『海を渡る』と彼の日記あるいは書簡を読み比べ、トーマス・マンが『ドン・キホーテ』をどのように読み進めたのかを時系列に沿って再構成しながら、『海を渡る』に認められる脚色を指摘し、よってトーマス・マンにおける『ドン・キホーテ』の影響を考える上での一助となることを目的としている。

## 2. 『ドン・キホーテ』読了までのプロセス

### (1) 読み始めるまで

1933年8月7日にトーマス・マンは「たびたびのことだが、胸を締めつけられるようなメランコリックな気分でいろいろ思い悩む」(156)と日記に書き付け、「ポー、それに『ドン・キホーテ』をまた読みたい気持ちに誘われる」(同)と付け加えた。マンが日記の中で『ドン・キホーテ』をまた読みたいという気持ちを明らかにしたのはここが初めてである。その後の彼の行動は素早い。約三週間後の8月30日には既に書物が届いている(176)。しかしマンがこの時に読みたくなかったのは『ドン・キホーテ』だけではなかった。既に引用したように、エドガー・アラン・ポーの名前もあがっている。そして先に読んだのはポーの方であった。同じように読みたい気持ちに誘われながらも、『ドン・キホーテ』が優先されてはいないことを確認しておきたい。おそらくはトーマス・マンが、後で見るように、この時まだ一度も『ドン・キホーテ』を最後まで読み通した経験がないことと関連するであろうからである。

ところが、ポーを読み始めてみると、マンの気持ちに変化が生じてくる。書物が届いた3日後の9月2日の日記には「ポーを読むことは、『ヨゼフ』によりは、執筆を予定している『ファウスト』小説の方に向いている」(178)という感想が述べられ、計画を変更するかのように「『ヨゼフ』のためには

『ドン・キホーテ』を読むつもりだ」(同)と続けている。一般的に言って、作家が他の作家の作品を読む場合には自らの創作との関連が強く意識されていることが容易に推測されるが、ここでのマンの場合は明確に『ドン・キホーテ』再読が『ヨゼフとその兄弟たち』四部作と関連していることが注目に値する。この時点でマンは既に第1巻にあたる『ヤコブ物語』(1933)の刊行を間際に控え、第2巻にあたる『若いヨゼフ』(1934)も脱稿しており、予期せぬ亡命生活を強いられて中断していたとは言え第3巻の『エジプトのヨゼフ』を執筆中だったので<sup>8</sup>、前2作品を執筆する過程で、あるいは第3巻の今後の展開を考える上で、『ドン・キホーテ』再読が浮上してきたことになる。とすれば『ヨゼフとその兄弟たち』四部作における『ドン・キホーテ』の影響も、第1・2巻ではなく第3巻以降に直接関わってくるテーマとなるのは言うまでもない。

## (2)『ドン・キホーテ』前編を読み始める

トーマス・マンはいよいよ『ドン・キホーテ』を改めて読み出す。9月7日、つまりさらに5日後の日記にこう記されている。「『ドン・キホーテ』をまた読み始めたが、今度は最後まで読み通すつもりでいる」(184)。ここで言う「最後まで読み通す」とは『ドン・キホーテ』前編と後編を合わせたの読了を指していると考えられるが、『海を渡る』でもマンは素直にこの事実を認めている。「自分でも不思議だが、これまで一度も、その全部をまとめて読み終えたことがなかった」(IX、544)。トーマス・マンがこれまでに『ドン・キホーテ』を読み出したことはあっても、読了したことはなかったという事実は、彼の『ドン・キホーテ』受容を考える上で見過ごすことはできない。1933年9月という時点までにも、マンは『ドン・キホーテ』に言及したことがある。例えば、1919年7月5日付けのグスタフ・ブルーメに宛てた手紙の中に「この戦争を(中略)ゲルマン的中世が自己の命運をかけて打った最後の大芝居であり、巨大なドン・キホーテ的行為であると思うようになりました」(XII、184)という一節がある。しかしこの表現に窺える彼の『ドン・キホーテ』観は、文学史の記述という通説か、あるいは学者や他の作家たちによる研究や評論を参照するといった二次的な資料にもとづくもの

であることを忘れてはならない。つまり、トーマス・マンが独自の『ドン・キホーテ』観を持つに至るのは1933年の秋以降に限られるのである。

とは言え、スペインが世界に誇る大作家の小説をそれまで彼が一顧だにできなかったという訳ではない。彼は何度か読もうとはしたはずである。もしくは読むべきだという義務感にかられていたのかも知れない。そして実際に読んでみたものの、面白くなかった。だから途中で読むのを放棄したのである。これが真相だとほとんど断言できる。と言うのは、以後の日記に『ドン・キホーテ』を読んでいることが散発的に記されるのだが、「『ドン・キホーテ』を読む」(9月12日、189)「食後『ドン・キホーテ』を読む」(9月20日、195)「私は非常に疲れており、『ドン・キホーテ』も長くは読み進めることが出来なかった」(9月23日、197)「早目にベッドに入り、就寝まえ『ドン・キホーテ』を数ページ読む」(9月25日、201)「『ドン・キホーテ』を少し読んだあと、十一時に明かりを消し、熟睡」(9月27日、205)と実に素っ気ない記述に終始しているからである。翌月10月の日記に至っては、この世界文学の古典を読んでいるという記述はまったく見あたらない。確かにこの時期には、余儀なくされた亡命生活の中で、ドイツ亡命者の会合地点にもなっていたサナリ＝シュル＝メールからチューリヒ近郊のキュスナハトへ転居するという慌ただしさが絡んではいる。また、転居のために乗り込んだ寝台車の中でも『ドン・キホーテ』を読もうとしているくらいに、努力はしていることも窺える。しかし、たとえルカーチが物知り顔で「数世紀にわたって続くセルバンテスの人気の秘密は、『ドン・キホーテ』が人の心をとらえる魅力ある読物だという点にある。読者は読み始めたらほとんど巻を措くあたわず、読みながら笑ったり泣いたりするが、退屈を感じることは決してない」<sup>9</sup>と力説したところで、トーマス・マンは11月に入ってからすぐの日記に、自分を偽ることなく正直にこう記している。「晩になってなお『ドン・キホーテ』を読み進めたが、心底から退屈する」(11月2日、252)。

読んでいる内容に対するコメントもまったくないので、マンがどの辺りを読んでいたのか不明なのが非常に残念だが、11月9日の日記には珍しく、初めてのコメントが付いている。「寝入る前、また少し『ドン・キホーテ』を読み、「俺は誰にも孕まされちゃいねえ」という、理髪師にたいするサンチ

ヨ・パンサの非常におどけた大衆受けする返答には笑わされた」(258)。これは『ドン・キホーテ』前編の第47章にあたる<sup>10</sup>。およそ2ヶ月の間、断続的にであれマンは『ドン・キホーテ』を読み進めたが、前編でさえまだ読了していない。前編を読了するだけでもまだ7章も残っている。この間にも彼は他の作家の作品を読んでいることと対比させれば、ことは明白であろう。トーマス・マンにとって『ドン・キホーテ』前編はつまらない退屈な作品でしかなかったのである。

### (3)『ドン・キホーテ』前編から後編へ

日記の中には言及がないので、マンが『ドン・キホーテ』前編をいつ頃読み終えたのかは不明である。読み終えたのかどうかさえ怪しいとも言いうるが、その後も『ドン・キホーテ』を読んでいる旨の記述がある 「ゆうべ遅く、また『ドン・キホーテ』を読む」(12月3日、276) ので読み進めてはいたのであろう。おそらくは1933年の年内に『ドン・キホーテ』前編を読み終え、そのまま後編へと読み進めたようである。

ところが、後編へ移ると徐々に様相が変わってくる。「セリーヌを読み終えたので、『ドン・キホーテ』を読む」(1934年1月26日、316)、「少し『ドン・キホーテ』を読んでようやく眠り込んだ」(1月31日、321)と、記述は相変わらず素っ気ないが、これらはともに旅先でのことなのである。既に講演旅行へも携えるほどになっているが、さらに、これまで『ドン・キホーテ』は就寝前に読むことを繰り返していたマンが、旅先ではあれ午後のひとときにこの小説を紐解いている。「二時に食堂で非常に上等の昼食を取ったあと、荷物をあげ、ラジオでの朗読用にパウシャンの章を今一度点検。ついでベッドで休息、『ドン・キホーテ』を少し読み進め、五時半にお茶とトースト。ジュネーヴでの講演の件で電話連絡」(2月1日、322)「ホテルに戻り、バルコニーでさらにいささか陽光をたのしみ、『ドン・キホーテ』を読む」(2月4日、327)。そして初めて『ヨゼフとその兄弟たち』四部作と関連した記述が登場する。「そのあと、すぐ近くのホテルに戻り、葉巻をくゆらせながら『ドン・キホーテ』を読んだが、これは、『ヨゼフ』のこれからの部分、すなわち、パティファルとモント＝カウに対するヨゼフの関係を考える上で

刺激になった。その意味で、サンチョ・パンサが主人の無邪気な魂に対して捧げている畏敬の念に感動」(2月3日、325)。マンが『ドン・キホーテ』に対して感動という反応を示したのは勿論これが初めてである。この時、彼は『ドン・キホーテ』後編の第10章あたりを読んでいたと考えられる<sup>11</sup>。

#### (4)『ドン・キホーテ』後編に反応を示す

講演旅行を終えてキュスナハトへ戻ってからは、また就寝前に『ドン・キホーテ』を読む習慣を復活させたトーマス・マンだが、「熱を伴った疲労感を覚え」(2月11日、336)ていても「ベッドで少し『ドン・キホーテ』を読」(同)むことを止めず、『ドン・キホーテ』後編第17章を読むに至った2月13日にはまたポジティブな反応を示している。「寝入る前、『ドン・キホーテ』のライオンの章を読んで感嘆」(340)<sup>12</sup>。その後もマンは『ドン・キホーテ』後編を順調に読み進める。「そして、寝入る前、『ドン・キホーテ』を読み継ぐ」(2月20日、346)「ゆうべは、『ドン・キホーテ』を数ページ読んだあとすぐ寝ついた」(2月27日、355)「ゆうべ『ドン・キホーテ』を数ページ読んだ」(3月16日、376)。もうこの頃にはマンにとって『ドン・キホーテ』という小説は講演旅行へ出る際の当然の携帯品と化している。「無風で乳白のもやがかかった、快適な朝である。このぶんでは日中は日が差すかもしれない。すぐにひげを剃り身仕度をしたあと、九時ごろ朝食、ついで小さな荷物を拵える。文学上の装備は、『ヴァーグナー』講演の原稿、『ドン・キホーテ』、それにレスコフ一冊である」(3月21日、384)。

『海を渡る』という紀行文に結実するアメリカ旅行の話が具体化するのはいずれからちょうど一ヶ月後の4月21日のこと(412)だが、4月に入った頃には既にトーマス・マンは『ドン・キホーテ』後編をかなり高く評価するまでになっている。作品全体に対するコメントが現れ出すのもこの頃である。「『ドン・キホーテ』は、一つの作品がその制作過程において、作者が予想していなかった高まりを見せ、引き上げられ、高貴化されて行く偉大な例の一つだ」(4月7日、400)。こうしたコメントに先立って、友人の神話学者ケレーニイへの3月24日付けの手紙でもマンは『ドン・キホーテ』の話題を持ち出して、アブレイウスの『黄金の驢馬』が影響しているのではないかとい

う自説を述べるまでになっている。「その結果、ふつうなら絶対に思いつか  
 なかったような世界文学的な関連が読者の頭にひらめいてきます。たとえば、  
 ギリシアの小説とセルバンテスの関係などはどうだったのでしょうか？セル  
 バンテスはギリシアの小説を知っていて利用したのでしょうか？たまたま私  
 は、いまちょうど『ドン・キホーテ』を読み直しています。それとも、はじ  
 めて徹底的に最後まで読み通したと言ったほうがいいかも知れません」(XII、  
 267)。ここで「読み通した」と言っているのは言葉の綾であって事実ではな  
 いが<sup>13</sup>、マンはこの手紙の中で「カマーチョの結婚式」(『ドン・キホーテ』  
 後編第21章前後)と「驢馬の鳴きまねの冒険」(同後編第25章から第27章)  
 に言及しているので、この辺りまでは読み進んでいたと考えてもいいだろう。  
 2月13日に『ドン・キホーテ』後編の第17章を読んでいたことを考慮に入れ  
 ると、約40日くらいかけて10章程度の進度だから、マンはセルバンテスの作  
 品を読むのを決して急いではない。ゆっくりとすこしづつ読み進めていた  
 ことがよく分かる。

#### (5) 初めてのアメリカ旅行へ出発する

「ケレーニイの手紙によって、『ドン・キホーテ』とギリシアの小説、そ  
 の中でも特に『驢馬』との関係についての私の所見の正しさが裏書きされた」  
 (426)とマンが日記に綴ったのは5月2日である。既にアメリカ旅行は2週  
 間余りに迫っていた。トーマス・マンは『ドン・キホーテ』前編はつまらな  
 いと感じながらも、後編には深遠なるものを感じ始め、こうしてますますそ  
 の世界に惹かれてのめり込んで行くのだが、まさにその時にあのアメリカ渡  
 航で10日間も船旅を余儀なくされたのである。乗船地ブローニュへ向けて  
 列車で移動している最中でもマンは「少しまどろみ、そのあと『ドン・キホ  
 ーテ』を読」(5月18日、441)んでいる。つまり、このアメリカ旅行にもト  
 ーマス・マンは、これまでの講演旅行の時と同様に、実際に『ドン・キホー  
 テ』を携えていたことが分かる。彼が郵便船ヴォーレンダム号に乗り込んで  
 大西洋航海に出発したのは5月19日のことで、その翌日、つまり航海2日目  
 の日記には『ドン・キホーテ』を読んでいることだけではなく、興味深いコ  
 メントまで残されている。「『ドン・キホーテ』を読んでいるうちに、あの追

放されたムーア人と、彼が祖国愛に燃えつつも、良心の完全な自由を享受することができるドイツに定住するというエピソードにぶつかった。ここには、ムーア人とユダヤ人を迫害せよという国王の命令を良しとした作者の、忠実な迎合ぶりがほの見える」(5月20日、443)。このエピソードは『ドン・キホーテ』後編第54章に見い出せるもので<sup>14</sup>、読了まで残すところあと20章にまで迫っている。しかし最後の20章をトーマス・マンはわずか1日で読破する。おそらくは旅先での無為な時間をかなりなまで読書にあてていたからであろうが、それにしても以前とは読む速度が格段に違う。『ドン・キホーテ』前編を読んでいる時のマンからは予想もつかないほど、『ドン・キホーテ』後編に魅了されたマンの姿がここにあると言ってもあながち見当外れではないだろう。航海4日目、5月22日の日記には前日の『ドン・キホーテ』読了を記すだけでなく、「何とユニークなモニュメントだろう！」(445)に始まる長く詳細な感想を書き付けている。全文を引用することは差し控えるが、邦訳でも優に800字を越える。これはまた『海を渡る』の内容とも密接に関連している。思い返せば、前年の1933年9月7日から始まったトーマス・マンの『ドン・キホーテ』読了という試みは、8ヶ月と2週間の後にこうして達成されたのである。

### 3. 『海を渡る』執筆のプロセス

アメリカ旅行からチューリヒへ戻ったマンは込み入った状況に陥る。当時の政治的な情勢と絡んで、彼がハウプトマンを礼賛した講演を随想集から削除することになり、その空隙を埋める必要が出てきたのである。1934年8月11日の日記には「自室に戻って、例の「政治論」のための資料を片づける。もうこの仕事をするのは止め、今後の推移を待つことに」(523)すると書かれており、執筆活動の方向性に変化が生じていることが分かる。そして続けて「差し当たりの文筆活動としては、「新チューリヒ新聞」の学芸欄のための原稿を一本考えている」(同)と書き付けた。この原稿が後に『海を渡る』という紀行文となるものである<sup>15</sup>。この時に「たぶん」を附してはいるが、既に「大洋航海をテーマにすることになるだろう」(同)と付け足している。翌日の日記には早くも『ドン・キホーテ』についての考察と航海記



を結びつけようと思っている」(8月12日、524)というアイデアが記され、さっそく「例の学芸欄用の原稿執筆[に]かかる」(同)とある。マンにとって今回の初めての大洋航海と『ドン・キホーテ』読了がいかに緊密に結びついていたかを雄弁に物語る記述だと言えよう。さらに翌日には既にタイトルも決められていて、執筆の準備に勤しんでいたことが見て取れる。「午前中、『ドン・キホーテとともに海を渡る』のための抜き書きとメモ」(8月13日、525)。その翌日も「再び「学芸欄」用の原稿の執筆にかかったが、割合うまく行って、随想集の補遺として格好のものになるかも知れない」と日記に記しているが、『海を渡る』が形を整える前に「随想集の補遺」という位置付けがなされていることには注目すべきであろう。8月15日には友人のヴェルフスケールとの語らいの中でも『海を渡る』を話題にしている(527)が、さらに2週間経った8月30日の日記でも「『海を渡る』に取り組み、材料の配分をおこなう」(538)とあるので、具体的な執筆が本格的にはまだ始まっていない様子が窺える。そして、この後に「いまとなつては、まずこの学芸欄用の文章を書くことによって、短編集を補完しつつ、同時に政治論のための冷却期間を作るという考えは、好都合のように思える」(538)と書き添えているのは、やはり『海を渡る』が補遺でしかないという以前と同じ考えを捨てていないことが見て取れるであろう。

翌8月31日から「『海を渡る』を書きはじめ」(538)たトーマス・マンは、以後かなりコンスタントに執筆を進めている。「いろいろ連想が広がっていく仕事だ」(9月1日、539)とか「この仕事をしていると、『マリーオ』を書いた当時のことを思い出す」(9月13日、547)や「可もなく不可もなし」(9月14日、548)のように一言添えている場合もあるにはあるが、概ね「書き進める」や「執筆を続行」といった簡素な表現で、日常と化した作家生活のごく当たり前の一面を記録している感が強い(541~549)。それでも、日記をつけた時は必ず『海を渡る』執筆に触れているのは、この時期のマンにとってこれだけが手を付けることのできる当面の仕事だったからであろう。9月後半に入ると「叙事的幻想についてたっぴり一頁書いた」(9月17日、550)「西へ向けての航海中に時計の針を戻すくだりを執筆」(9月19日、551)といった『海を渡る』の内容に関する記述をマンが添え始め、お陰でその時点

でどの部分を執筆していたのかが明らかになる。前者は『海を渡る』の 5月21日、後者は同じく 5月22日 の内容に当たるので、ここではまだ全体の半分も完成していないことがこうして判明する。しかしそれなりに『海を渡る』執筆に脂がのってきていると窺わせるのは、「『海を渡る』をせっせと執筆」(9月20日、551)、「例の学芸欄用の原稿をせっせと書いている」(9月22日、552)、「例の学芸欄用原稿の執筆に大いに精励」(9月25日、553)、「熱心に執筆を続行」(9月26日、554)、「熱心に書き進める」(9月27日、554)というように様態を示す言葉が附されていることである。また、9月24日に「目下、古代との様々な関係の箇所を執筆している」(553)、9月28日に「キリスト教についての一章」(555)と日記に記しているが、これらはともに『海を渡る』の 5月24日 の内容に相当する。そして9月末日には書いた原稿が「もうほとんど五十ページにはなっている」(556)。

『海を渡る』の完成稿が最終的にどれほどの分量になったのかは不明だが、この紀行文は 5月19日 から 5月29日 までの11日間の航海日誌という体裁をとっていて、既に見たように9月末で6日目に当たる 5月24日 の辺りを書いていたということは、その年の10月に入った時点でトーマス・マンは『海を渡る』を半分以上書き終えていたと推測される。8月31日から具体的に書き始めたとしても、9月はほぼこの紀行文の執筆だけに集中していたようだが、マンは残りをわずか10日ほどで脱稿する。「十一時まで『海を渡る』を書き進める」(10月4日、560)、「朝食後、結末をめざして『海を渡る』を書き進める」(10月6日、562)、「執筆は終わりに近づいている」(10月10日、565)そして「きょうの午前、『ドン・キホーテとともに海を渡る』を書き終える」(10月11日、566)と日記はその経過を語る。しかしこの集中的な執筆態度は皮肉にも『海を渡る』という作品に対してはネガティブなものであった。「そろそろ、優柔不断の状態を過ごす縁としてきた、お手軽で中間的な仕事(=『海を渡る』執筆のこと<筆者注>)にけりをつけて、絶対に完成しなければならない『ヨゼフ』に立ち戻るべき時期が近づいた」(557)と10月1日の日記に記したトーマス・マンは、『海を渡る』を書き終えた10月11日の日記にもこう書き添えている。「大した作品ではないが、ともかくもまた何かが出来上がったのであり、この雑然とした作品は、ひょっ

とすると、またまた何かを出来上がらせるということだけのために書かれたのかも知れない」(566)。とどのつまりは、マンにとって『海を渡る』という紀行文は場つなぎの一時的な仕事に過ぎなかったのである。

#### 4. 事実と脚色：『海を渡る』と『ドン・キホーテ』

『海を渡る』がたとえ航海日誌の形式で書かれていようと、すべてが事実だと考えるような天真爛漫な感性を読者が持ち合わせる必要はないし、彼の日記をそのまま公開していると考えるべきでもない。物書きが文章を綴る時には常に脚色という要素が入り込むものであり、ルポルタージュでさえ真実をより効果的な表現で伝えようとするならばレトリックという脚色を利用する。トーマス・マン自身も『海を渡る』の中でこう言っている。「空想のオがあるということは、架空に物事を考えだすということではない。与えられた事物を別のものに創りかえるということなのだ」(IX、343)。『海を渡る』が実際に書かれたのはマンが初めてのアメリカ旅行を終えてチューリヒに帰ってからのことであることは既に見た。ならば『海を渡る』に見いだせる次の文章が事実でないことは明らかである。「夫婦で船出のヴェルモットを舐めながらこんな文字を綴っている」(IX、343)。出航しようとしている時にマン夫妻がヴェルモットを飲んでいたことは事実である。いや、ヴェルモットだけでなくポートワインも飲んでいた。出航した日の日記に「喫煙室でベルモットとポートワインを飲んでいる間に、船は出航」(5月19日、442)とあるからだ。しかしその時に「こんな文字を綴っている」というのは後からの脚色である。文章に船出の臨場感を与えるべくなされたに過ぎない。この様な陳腐とさえ言いうる瑣事を指摘しなければならないのは、トーマス・マンの『海を渡る』という紀行文に言及する際に、事実と脚色の区別がなされないまま混同しているような誤謬が未だに見いだせるからである<sup>16</sup>。本稿では『海を渡る』に見られる脚色をすべて指摘しようとは目論んでいないし、それが目的でもない。マンが『海を渡る』の中で『ドン・キホーテ』をどのように取り上げているのかという観点から言って、最も重要だと思われる脚色を指摘するだけにとどめたい。

その指摘すべき脚色とは、大洋航海と『ドン・キホーテ』を読むことを結

びつけるという全体を貫くテーマの設定に見られるものである。マンはその大洋航海を「今度の冒険」(IX、342)と呼び、10日もかかる大航海を前にして緊張と同時に厳粛な雰囲気を感じている様子が描かれる。まだまだ大航海がコロンブスの時代とさして変わらないような難事業であったという時代的な制約もあるだろうが、旅行に携えていく読み物については一家言を持っていた。「旅で読むものはごく軽い浅薄な「時間潰し」をしてくれる愚劣なものでなければならぬというのが世間一般の考えだが、私にはいまだにこういう気持ちが解せない」(IX、344)と言い、「なぜ世の中の人々がほかならぬ旅というような晴れがましくも厳粛な機会に、自分の精神的習慣を脱ぎすて、わざわざ低級なところへ身をおとすようなことをやるのか」(同)理解できないトーマス・マンにとっては、「われわれの今度の航海に対して尊敬の念を持っているのだから、旅の伴侶たるべき読物をも敬重するのは、けだし理の当然である」(同)となる。そして『ドン・キホーテ』は、世界の書である。したがって、世界旅行には打ってつけの書物だ」(同)という論理展開を見せる。ここで既に引用したように「自分でも不思議だが、これまで一度も、その全部をまとめて読み終えたことがなかった」(同)と告白して、「それをこの船旅でやってみよう」(同)と宣言する。ここで彼が言う「それ」とは「全部をまとめて読み終え」ることを明らかに指している。「そして、この物語の海を乗りきってみよう。丁度われわれが十日がかりで大西洋を乗りきるように」(同)と結んでいる。この前に「ドン・キホーテという人間を描くということは、大胆な冒険」(同)だとして「これを読むこと」(同)を「受容的冒険」(同)と表現しているが、大洋航海を「今度の冒険」と呼んだことと呼応して、ようやく意図が明らかになる。つまり、船旅という冒険に臨んで、大胆な冒険である物語を読むという受容的冒険をすることが『海を渡る』全体を貫くテーマとなるのである。

この紀行文においてトーマス・マンは出航と同時に『ドン・キホーテ』を読み始め、寄港地へ到着するまでに読み終えるという設定をしている訳だが、これが事実と異なることはもはや言うまでもないことである。既に見たように、現実の出航日である5月19日までに、マンは『ドン・キホーテ』を後編のかなりなところまで読み進んでしまっている。また、同書を読み終えたの

は航海3日目の5月21日である。船旅を終えるにはまだ1週間も残している計算になる。だから、この旅に携帯したのが『海を渡る』で述べているように「袖珍型」(IX、340)の「オレンジ色布表装の四巻本」(同)だとしても、実際に旅行鞆に入れていったのは4冊すべてとは限らない。最終巻である第4巻だけかも知れないのである。しかしながら、『海を渡る』の中で初日に当たる5月19日の章で「一冊取り出した」と言っているのは、出航と同時に読み始めるのだから、当然のことながら第1巻を指していることになる。紀行文の中での脚色となる『ドン・キホーテ』の読書プロセスと現実での『ドン・キホーテ』の読書プロセスを混同してはならないのだが、しかしマンはこの脚色となる設定を最後まで厳密に維持しているのでもない。いわば不完全な形でしか遵守していないので、余計に混同あるいは誤解を誘発しているようにも見受けられる。そこにトーマス・マンの『ドン・キホーテ』受容に秘められた一面があるとも言うのであろう。

『海を渡る』の初日5月19日では『ドン・キホーテ』の具体的な内容にはまだ触れられていない。これから読み始めるという設定だからであろうが、2日目5月20日に入ってティークの独語訳を褒め称えることから、トーマス・マンは『ドン・キホーテ』について語り出す。原著者たるシデ・ハメーテ・ベネンヘリ存在から語り口に混じる間接話法を指摘し、例として「物語の伝えるところによれば」や「アラーの神よ、讃えられてあれ！」とベネンヘリはこの章の冒頭において三度叫んで、さて語ってというようは」を挙げている。前者は『ドン・キホーテ』前編にも見られる表現だが、後者は具体的には『ドン・キホーテ』後編第8章に見られる表現なのである。またユーモラスな章の標題として、たとえば「サンチョ・パンサとその妻テレサ・パンサとのあいだに交わされたる分別ありかつ滑稽なる会話、ならびに記録するに足るべきその他のことども」を挙げ、風刺的な滑稽味のある標題として「ベネンヘリの言えるが如く、これを注意深く読むならば、読む者の知れたもうべきことども」を挙げているが、これらもそれぞれ『ドン・キホーテ』後編第5章と同第28章の標題である。続いて贋作『ドン・キホーテ後編』の話題に移り、セルバンテスの対応を語るが、この贋作はセルバンテスの『ドン・キホーテ』前編が出版されてから10年後に出版されたも

のであるから、直接的には前編とは関係のない話題であるだけでなく、マンが長く引用しているのもセルバンテスの『ドン・キホーテ』後編の序文である<sup>17</sup>。続いてようやく前編について語るが、これも後編との比較において引き合いに出されるだけである。「ところが、前作を読んでも、詩人が元来はそう大して重きをおいてもいなかった風刺作品、滑稽に生気の溢れた風刺文、内輪な構想、偶然かつ必然に一卷の万人の書、世界の書となった様子がよくわかる。第二部の方も、もしその製作に際して自作を模倣作と区別しようという名誉心がはたらいていなかったならば、あれほどにヒューマニズムや学識めいたものや無味乾燥の筆づかいなどによって害われるようなこともなかっただろう」(IX、348)。『海を渡る』を構成する5月20日付けの文章の末尾辺りではサンチョ・パンサに話題を転じ、「自分の善良で途方もない主人を心から慕」(IX、349)う点を「麗しいかぎり」(同)で「彼もまた愛すべき人間」(同)だと言っているが、1934年2月3日の日記「サンチョ・パンサが主人の無邪気な魂に対して捧げている畏敬の念に感動」(324)と対応するとすれば、やはり『ドン・キホーテ』後編第10章辺りと関連する話題なのである。

後は煩雑になるので割愛するが、『海を渡る』に見られる『ドン・キホーテ』論はほとんどすべてが後編の話題から組み立てられている。こうして冒頭で設定された大洋航海=『ドン・キホーテ』読破という冒険の構想は、後編の話題を持ち出すことでその翌日から破綻してしまっている。『海を渡る』という旅行記は、結局のところはトーマス・マンが大洋航海の船上で実際に読んでいた『ドン・キホーテ』後編の読後感をまとめたような内容になってしまっているのである。これはマンがそれほどまでに『ドン・キホーテ』後編を高く評価していたことを意味すると同時に、様々な事情が絡んではいたが、この紀行文が最初の目論見を達成できずに、不完全燃焼のまま終わった作品でしかないということまで暴露してしまっているのであろう。

## 5．最後に

トーマス・マンにおける『ドン・キホーテ』前後編の読破と初めての大洋航海となるアメリカ旅行は同時進行ではなく、部分的に重なっていただけで

あった。チューリヒへ戻ってから書かれた紀行文『海を渡る』も事実を書き記した航海日誌ではなく、そのスタイルを借りた『ドン・キホーテ』後編の印象記に過ぎない。トーマス・マンは確かに『ドン・キホーテ』前後編を読破した。しかしながら、彼が興味を示したのは後編の方であって、前編に対してはポジティブな反応は見られなかった。期せずして亡命生活を余儀なくされたトーマス・マンがアメリカ旅行から戻った後に、手許に十分な資料もメモもない状態で依頼を受けた仕事として『海を渡る』を書いたのは、大洋航海とその旅の途上で読み終えた『ドン・キホーテ』後編の印象がまだ新鮮だったからであろう。他に文章を書く材料にも事欠いていたという事情もあったかも知れない。しかも政治的な内容からは距離を置こうとしていた時期でもあった。つまりはこうした時宜的な要素が非常に絡んだ結果として生まれたのが『海を渡る』だったのである。トーマス・マンが中断しながらも『エジプトのヨゼフ』を書いている中で『ドン・キホーテ』読破を思いついたことも事実だが、最終的に『ヨゼフとその兄弟たち』四部作を書き終えた後になって、マン自身が述べた感想が彼にとって『ドン・キホーテ』がどのような存在だったのかを雄弁に物語っている。少し長いが、締めくくりとして引用したい。

一つの作品の固有の性格のための目標というものがある。作品が目指すカテゴリー、作品が密かに前途に持つ意図というものがある。それはすなわち読書を指すのであるが、作者は作品制作の間に読書を優先させ、それを有用なことと感ずるのである。ここで私が言わんとすることは、具体的な補助資料、素材研究のことではなく、作者自身の意図に大変近い関係にあると見られる世界文学の諸作品のことなのである。これらの作品の有する見解が作者のムードをかもしだし、作者がそれを範にして励む、そういう模範のことなのである。そのためには役立つための、適合せぬもの、無関係なものは、衛生的見地から排除される、これは目下のところ実利がない、というわけで禁ぜられるのである。ヨゼフ執筆の数年間そのような励ましの読書となった二冊の本があった。ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディー』とゲーテの『ファウスト』であった。<sup>18</sup>

ここに『ドン・キホーテ』の名前はない。

< 注 >

- 1 浜川祥枝「あとがき」、トーマス・マン『日記1933-34』、東京、紀伊国屋書店、1985、628頁。
- 2 トーマス・マンの日記研究に関する邦語文献については、西南学院大学の赤尾美秀氏のホームページ（[www.seinan-gu.ac.jp/akao/mann-index.html](http://www.seinan-gu.ac.jp/akao/mann-index.html)）を参照させていただいたが、合計6点の論文・書評が掲載されているだけであった。稿末の参考文献に収録した論文を除けば、以下の3点だけである。
  - ・ 山崎章甫「トーマス・マンの日記(書評)」、東海ドイツ文学会『ドイツ文学研究』10号、1978、140～144頁
  - ・ 青木順三「殉教者となるか師表となるか トーマス・マンの日記を読む」、『白描』の会(逗子)編・芸立出版(東京)発行『白描』復刊6号、1979、2～8頁
  - ・ 長橋芙美子「ドイツのための苦悩 トーマス・マンの日記(1933-34)を中心とした覚え書」、『言葉の力で』、1982、207～232頁
- 3 トーマス・マンは渡米を数回行っている。1回目は1934年にアメリカ合衆国での『ヤコブ物語』の英訳出版を機に行ったもので、『海を渡る』はこの時の大洋航海から生まれている。ナチス・ドイツと自ら縁を絶って渡米するのは1936年のことであり、この点を考慮に入ると牛島信明氏が『ドン・キホーテ』の文学的影響力を説明しようとした次の記述は曖昧で誤謬を含んでいる。「ナチスの迫害を逃れてアメリカに渡ったトーマス・マンは、船旅の友に『ドン・キホーテ』を選んだ。そして、その旅から生まれたのが、『ドン・キホーテとともに海を渡る』という素晴らしい本である。」(牛島信明『ドン・キホーテの旅 - 神に抗う遍歴の騎士』、東京、中央公論新社、2002年、ii～iii頁)
- 4 Gnutzmann, Rita.: “Thomas Mann y ‘Don Quijote’”, *Anales Cervantinos* 17(1978), pp.75-83.
- 5 Koppen, Erwin.: “Thomas Mann y Don Quijote”, *Thomas Mann y Don Quijote: ensayos de literatura comparada*, Barcelona, Gedisa, 1990, pp.243-257. (この論文は著者が論文集のスペイン語版を出版する際に書き下ろした未発表論文で、スペイン語版でしか公表されていないためか、ほとんど参照されていないように見受けられる。) 隈井秀人「セルバンテスからトーマス・マンへ - ドイツ文学に現れたドン・キホーテ論をめぐって」、学習院大学大学院ドイツ文学語学研究会『ドイツ文学語学研究』第17号、1993年、1～16頁、および「夢の中の騎士を求めて - Don Quijote-Lektüre mit Thomas Mann - 」、学習院大学大学院人文科学研究科『人文科



学論集』2号、1993年、97～119頁。隈井秀人氏のこの2論文は十分に日記を参照しているし、『海を渡る』と日記の間に見られる差異の指摘もあるのだが、『海を渡る』でマンが加えた脚色を十分に考慮に入れなかったために、事実と脚色を混同している点が見られるのが残念である。

6 浜川祥枝「あとがき」、上掲書、627～628頁。

7 つまりはトーマス・マンの作家論を展開するのではなく、あくまでもセルバンテスの作品が広くどのように読まれていったのかという受容研究を目指しているということである。よってトーマス・マンの作品についてはすべて翻訳に頼った。(稿末の参考文献を参照。)本稿では日記からの引用はすべて注(1)で記した翻訳から行い、後注とせずに本文に組み込み、括弧内に適宜日付を入れ、アラビア数字で引用頁を示す。また、書簡や『海を渡る』からの引用は新潮社版の全集から行い、やはり後注とせず本文に組み込んで、括弧内にローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を示す。

8 『ヨゼフとその兄弟たち』四部作の出版については、新潮社版全集別巻所収のH・ビュルギン、H・O=マイヤー編「トーマス・マン年譜」によると、四部作第1巻『ヤコブ物語』の刊行が1933年10月10日(575頁)、第2巻『若いヨゼフ』の刊行が翌1934年4月(579頁)、第3巻『エジプトのヨゼフ』の刊行が長い中断を挟んで1936年10月中旬(597頁)、第4巻『養う人ヨゼフ』はさらに長いブランクを置いて1943年12月(668頁)とある。しかし1933年3月15日の日記に附された注には「なお第一巻『ヤコブ物語』および第二巻『若いヨゼフ』の原稿はすでにベルリンのフィッシャー書店に届いていた」(7頁)とあるので、第2巻はこの時点で既に脱稿していたことになる。

9 ルカーチ「セルバンテス」、『ルカーチ著作集2 - 小説の理論』、大久保健治・藤本淳雄・高木研一訳、東京、白水社、1968、373頁。

10 邦訳の日記には注にもこのデータは添えられていない。セルバンテスの原文では“Yo no estoy preñado de nadie”となっていて、床屋(マンの日記の邦訳では「理髪師」)が使った“empreñarse”(「人から言われたことを簡単に信じる」の意味)という表現を捻ったもので、サンチョ・パンサの返答には「もう少し下卑た意味も含まれている」とCastalia版でL.A.Murilloが注を付けている。(vol.I, p.563)正にこの「下卑た意味」(おそらくは俗語の「オカマを掘られる」に相当する)の方にマンが注目したのかどうかは問わないが、参考のために『ドン・キホーテ』の該当箇所の邦訳を挙げておく。古い方から並べると、永田訳「わしゃ、だれにもひっかゝりゃしねえだ」(岩波文庫版正編(三)、273頁)、会田訳「わしゃだれにも、ひっかっちゃいねえだ」(筑摩世界文学大系10、299頁)、牛島訳「おいらは誰にもたぶらかされちゃいねえ」(岩波書店版新訳前編、519頁)となるが、このように見てくるとマンが読んでいた独語訳はかなり逐語的であるように思われる。この独語訳は『海を渡る』でマン自身が言及している(IX、346)ルートヴ

イッヒ・ティークの翻訳のことであろうが、Erwin Koppenによるとトーマス・マンはスペイン語が読めなかったらしい。(Koppen, E.: “Thomas Mann y Don Quijote”, pp.245-246)とすれば「ティークの訳文はこれまた古典的・浪漫的時代の、明朗で豊かな味わいのあるドイツ語であって、ドイツ語の最も幸福な一段階に立つものなのだから、その魅力は筆舌のよく尽くしうるところではない。(中略)あの当時のドイツ語は、『ドン・キホーテ』の堂々としたユーモラスな様式に実にぴったりとしているのである」(IX, 346)とまでマンがティークの独語訳を高く評価する時、あくまでも彼が抱いた『ドン・キホーテ』観とティークのドイツ語が「ぴったりとして」いたに過ぎないのであって、スペイン語原文を味わった上で名訳だという評価を下しているのではないことも付言しておきたい。

- 11 このデータも邦訳の日記には注にも記されていない。
- 12 「ライオンの章」が『ドン・キホーテ』後編第17章であることは、邦訳の日記には注にも記されていない。
- 13 完全に読了するのは、後で見ると、1934年5月21日である。
- 14 邦訳の日記には注にこのエピソードが『ドン・キホーテ』の「後編第三十四章にある」(444)と書いてあるが、このデータは誤謬である。これはマンが読んでいたティークの独訳本がセルバンテスの原作と章立てなどの構成が異なっていたからである。だから、たとえば、セルバンテスの原作では後編第25章から第27章にあたる「驢馬の鳴き声の冒険」のことを、マン自身も『海を渡る』の中で第二部の「同じく第九篇の第八、第十章の物語」だと言って、同様の誤謬を犯している。
- 15 ここで日記の邦訳にはこの原稿が「一九三四年八月三十一日から九月十五日にかけて書かれた」と注が付いているが、明らかな誤謬である。少なくとも、マンが『海を渡る』を書き終えたのは、後に見ると、1934年10月11日だからである。
- 16 本稿の注5参照。
- 17 具体的に引用すると次の通りである。「読者は、小生が彼奴(擬作の筆者)を馬鹿で単純で恥知らずだと罵ればよいにと思ひであらうが、小生にはさようなことは思ひも寄らぬ。罪の責めはおのずから彼奴の身に及ぶであらう、彼奴は己が身に責を負うであらう、それで宜しいのである。」(IX, 347) ちなみに、『ドン・キホーテ』の最新訳での該当部分を参考に挙げておく。「おそらく読者のあなたには、私の言い方が生ぬるく、私が堅忍の枠内に閉じこもりすぎであると思われることであろうが、私としては苦しむ者にさらなる苦悩を与えるべきではないとの配慮からそうしているのです。だって、かの作者が心に抱いている苦悩は疑いもなく、かなり大きなものなのですからね。」(岩波書店版新訳後編、4頁)
- 18 「自作について述べた講演」(1942年11月17日、V, 809)。ここでの「自作」とは『ヨゼフとその兄弟たち』四部作を指す。

< 参考文献 >

・一次資料

『トーマス・マン全集』全13巻、高橋義孝・円子修平編、東京、新潮社、1971-1972年

トーマス・マン『日記 1933-1934』、岩田行一・浜川祥枝・森川俊夫訳、東京、紀伊国屋書店、1985年

Mann, Thomas: *Cervantes, Goethe, Freud*, Buenos Aires, Losada, 1943

Mann, Thomas: *Travesía marítima con Don Quijote*, Madrid, Júcar, 1974

セルバンテス、ミゲル・デ・『新訳 ドン・キホーテ』全2巻、牛島信明訳、東京、岩波書店、1999年

セルバンテス、ミゲル・デ・『ドン・キホーテ』全2巻、会田由訳、東京、筑摩書房、1960-1962年（筑摩世界文学大系10・11）

セルバンテス、ミゲル・デ・『ドン・キホーテ』全6巻、永田寛定・高橋正武訳、東京、岩波書店、1948-1977年（岩波文庫）

Cervantes Saavedra, Miguel de: *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*, ed. Luis Andres Murillo, Madrid, Castalia, 1986, 4<sup>th</sup> ed., 3 vols.

Cervantes Saavedra, Miguel de: *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*, ed. Francisco Rico, Madrid, Crítica, 1998, 2 vols.

・二次資料

牛島信明『ドン・キホーテの旅 - 神に抗う遍歴の騎士』、東京、中央公論新社、2002年

奥田敏広「ドン・キホーテの愛あるいは「倒錯」の創造性 - トーマス・マンの「最後の愛」をめぐって」、京大教養部『ドイツ文学研究』報告38号、1992年、77～121頁

隈井秀人「セルバンテスからトーマス・マンへ - ドイツ文学に現れたドン・キホーテ論をめぐって」、学習院大学大学院ドイツ文学語学研究会『ドイツ文学語学研究』第17号、1993年、1～16頁

隈井秀人「夢の中の騎士を求めて - Don Quijote-Lektüre mit Thomas Mann - 」、学習院大学大学院人文科学研究科『人文科学論集』2号、1993年、97～119頁

平野篤司「ドン・キホーテ＝トリスタンの肖像 - 『ヴェニスに死す』をめぐって - 」、『東京外国語大学論集』27号、1977年、241～255頁

山戸照靖「一つのトーマス・マン像 - 主として1918～1921年の日記による」、片山良展・下程息・山戸靖・金子元臣編『論集 トーマス・マン - その文学の再検討

- のために』(ドイツ文学研究叢書 9)、大阪、クヴェレ会、1990年、315～338頁  
 ルカーチ「セルバンテス」、『ルカーチ著作集 2 - 小説の理論』、大久保健治・藤本  
 淳雄・高木研一訳、東京、白水社、1968、371～383頁  
 六浦英文「トーマス・マンの『日記1933年 - 1934年』 - 時局、ヴァーグナー講演、  
 創作のための覚書の問題をめぐって」、片山良展・下程息・山戸靖・金子元臣編  
 『論集 トーマス・マン - その文学の再検討のために』(ドイツ文学研究叢書 9)  
 大阪、クヴェレ会、1990年、339～366頁  
 Ferrer, Olga Prjevalinsky: “Del *Asno de Oro* a *Rocinante*”, *Cuadernos de Literatura*  
 3(1948), pp.247-257  
 Gnutzmann, Rita.: “Thomas Mann y ‘Don Quijote’”, *Anales Cervantinos* 17(1978), pp.75-  
 83  
 Koppen, Erwin.: “Thomas Mann y Don Quijote”, *Thomas Mann y Don Quijote: ensayos de*  
*literatura comparada*, Barcelona, Gedisa, 1990, pp.243-257  
 Nelson, Jr., L.(ed.): *Cervantes: A Collection of Critical Essays*, Englewood Cliffs, N.J.,  
 Prentice-Hall, 1969  
 Petriconi, Helmut: “Cervantes und Apuleius”, *Studia philologica. homenaje a Dámaso*  
*Alonso*, vol. II, Madrid, Gredos, 1961, pp. 591-598  
 Spitzer, Leo: “Thomas Mann y la muerte de don Quijote”, *Revista de Filología Hispánica* 2  
 (1940), pp.46-48

## Thomas Mann reading *Don Quijote* — in terms of Spanish Literature

Kenji INAMOTO

Key words: Thomas Mann, *Voyage with Don Quijote*, diary, Miguel de  
 Cervantes Saavedra, *Don Quijote de la Mancha*

[Summary]

Thomas Mann's personal data, picked up from his diary and arranged in a chronological order, show us another reality, not found in his travel writing *Voyage with Don Quijote*, about his reading of Cervantes's master piece.

Mann was not interested in the first part but only in the second part of *Don Quijote*, which he was reading just when he started for New York in a luxury liner. This fortunate coincidence drove him to spread, in his above-mentioned work, the praise of the founder of a modern novel born in Spain, filling the work with comments on episodes selected from *Don Quijote*, most of which are found in its second part he read on board. His temporary passion for Cervantes's novel had already disappeared when he finished the travel writing. In this respect, we had better not feature Cervantes's influence on Thomas Mann, at least, in such a degree that scholars have done till today.